

■肢体不自由・知的障害のある子どもたちへの実践事例

肢・知併置校におけるマルチメディアDAISY図書の活用方法

東京都立鹿本学園

本多桂子

はじめに

東京都立鹿本学園は、肢体不自由教育部門（小・中・高）と知的障害教育部門（小・中）、2部門5学部で構成される特別支援学校です。児童・生徒数は肢体不自由教育部門157名、知的障害教育部門285名、合計442名（令和元年5月1日現在）と東京都内の特別支援学校で一番多くの児童・生徒が在籍している大規模校です。

児童・生徒の障害の状況も多様です。本校は平成26年の開校から、読書活動の推進を学校経営計画で示し、読書環境の整備や読書週間など児童・生徒の意欲を高める取り組みを、全校一丸となって実践してきました。また、平成29年11月より『言語活動及び読書活動の充実事業研究指定校』として、東京都教育委員会から指定され、東京都内の特別支援学校の読書活動の支援などを積極的に行っています。マルチメディアDAISY図書は、本校の読書活動の一端を担っており、言語能力の向上を目指した授業実践を展開する際の大きな力になっています。

これまでの実践を振り返って

2019年6月に読書バリアフリー法が国会で成立し、電子図書はますます注目をされています。東京都の特別支援学校も読書環境の改善に各校が取り組み始め、各学校の特色に合わせて、実践を進めています。本校は開校以来、伊藤忠記念財団と共同研究を進め、それを全国へ実践発表する機会をいただきました。読書バリアフリー研究会で、各学校によって読書環境には大きく違いがあり、できることにも制限があることを聞きました。しかし、そこにかかわる人々の読書に対する考え方や子どもたちへの読書指導への気持ちは共通して、読み聞かせの大切さや読書環境の改善の必要性などさまざまな思いを聞くことができました。

そこで今年度は5年間を振り返り、特別支援学校でできるマルチメディアDAISY図書の活用方法について、整理していこうと思います。

初めてこのマルチメディアDAISY図書を使用したいと思っている司書教諭や学校図書館担当の方々の参考になれ

ば幸いです。

本校の特色

本校は人々と協調し豊かにたくましく生き抜くことができる確かな学力と自信を身に付けさせ、共生社会をつくる人材の育成を目標にしています。障害の程度・状態にかかわらず、言語の表現手段や文章表現の習得及び思考力・判断力を伸長させるため、前読書期の初期段階の指導から多読期・成熟読書期に至る段階的な指導を行うと共に、読書環境の整備やICT機器を活用した読書活動の拡大を図っています。

東京都の特別支援学校の中でも読書環境が整備され、教員にも読書指導がしやすい環境です。その中でマルチメディアDAISY図書をどのように活用し広めていくかは司書教諭として非常にむずかしいと感じています。良いものを知ってもらうには、伊藤忠記念財団が全国を巡回して読書バリアフリー研究会を開催し、マルチメディアDAISY図書の普及に貢献をされているように、「CDがあるので活用してください」だけでは決して教員も利用するわけではありません。また、一部の教員だけで広めようとしても、なかなかうまくいかないのが現状です。

そこで、本校では毎年、全校で昼休み、給食時間前後などを利用し、マルチメディアDAISY図書を活用したお話

会（以下、DAISYキャラバン）と称し、大型テレビによる集団視聴を継続展開しています。このDAISYキャラバンは両部門とも司書教諭が各教室を訪れる巡回型で行っています。全校への普及と啓発のために教職員へマルチメディアDAISY図書の使用方法の説明や、作品リストの提供を行い、発達年齢に応じた作品内容の選び方の助言を行う機会ができます。

しかし、学校の中でこれができる司書教諭はわずかです。そこで、貸出しやすいように作品をネットワークから見られるようにしたり、使用方法のマニュアル化を行ったりして工夫しています。教員は授業に有効であると実感した場合、自分で積極的に活用する真面目な人が多いです。また若手教員等はデジタル環境に親しんでいる人が多く、すぐに取り入れる場合もありました。授業に使用するだけでなく、余暇活動として活用してほしい願いから、家庭での貸し出しも実施しました。



DAISYキャラバンの様子

これらを実践した結果は、以前電子図書が使用率30%だったのを、10%程度使用率を上昇することができました。しかし今年度改めて同じ調査をした結果、電子図書を使用したことがある児童・生徒は全校で17%程度しかなかったのです。（文科省による児童・生徒の読書状況に関する調査）

現在、本校は教職員の大量異動期を迎えており、新転任の教員が多いことが、なかなか広まらない要因の一つと考えています。そのため、4月に学校図書館の使い方説明会で、初任者や転任者の研修を行い、マルチメディアDAISY図書を紹介する機会を設けています。

しかし、実際に使用するとすると、改めて使用方法や作品の良さをマニュアルで伝える必要があります。以下、各学級へ配布するマニュアルの抜粋です。

マルチメディアDAISY こんなことができます！

- ・プロの声優を使用しているので臨場感がある。
- ・読むスピードを変えたり、ハイライト効果があったりと音読学習に効果的。
- ・音読学習を通して係り活動や社会性の学習につながることもある。
- ・本校の人気、電車関係の作品もある。
- ・本校の生徒が読んでいる百人一首も聞ける。
- ・見せているときには他の授業準備もできる。
- ・教科書に使用されている作品も多数あり。
- ・全348作品と詩や宇宙などジャンルも多数あり。

マルチメディアDAISYの使い方

・教育用ICTネットワークに、LANケーブルで接続するか、無線LANで接続する

マルチメディアDAISYの使い方

① 生徒用サーバーを、ダブルクリック
(変化がないときは、もう一度ダブルクリックする)

ネットワークの場所 (1)

読み専用 (WORKGROUP) (2)

読み専用 40.3 (2012.02.02)

⑥ 再生ボタンを押す

再生スピードやハイライトの色、画面の大きさを変更することができます。

大型テレビを使って
DAISYを小集団で
視聴することができます。

マニュアルの抜粋スライド写真

また、パソコンとタブレット型パソコンで使用する場合の違いを、以下のようにまとめました。

〈パソコンとタブレットの違い〉

端末	パソコンと大型TV	タブレット
対象	集団	個別
準備	機器の準備を要する	準備はほとんど必要なし
効果	友達と一緒に読むことでの影響あり	自分のペースで読むことができる

これからの マルチメディアDAISY図書

本校の読書活動は、両部門ともに、小学部1年生の2学期から本格的に始まります。両部門ともに教員が積極的に図書指導を行うことで、本への興味を高めるようにしています。

肢体不自由教育部門は障害により自分で本をめくる、選んで取り出すことの困難さがあるため、教職員が図書館へ一緒に行くことが、貸出数に大きく影響します。

それに対し知的障害教育部門では、図書貸出マナーの指導は特に重要であり、本を楽しむための事前指導を要します。教員が貸出に対してのルールを段階的に指導していくことが、読書習慣を定着させることの第一歩となります。生徒の発達の実態に応じて習慣化には差が生じます。このような読書活動を始めてから、本をめくるのが大好きで、本を集中して見られるようになって、見る力が伸びたり、ひらがなを指差ししながら読めるようになったり、友達を誘って図書室へ行き、友達へ読み聞かせをしようとする児童が見られるようになります。

この読書活動と並行しながら、マルチメディアDAISY図書も、取り入れて授業を展開していきます。特に知的教育部門では集団で使うことがほとんどなので、友達を意識して文字を覚

えることに役立ちます。また読書活動と連動することで、見ることへの関心も高まります。肢体不自由教育部門の準ずる教育課程の児童・生徒ではタブレット端末で調べ学習をしたり、障害の重い児童・生徒、医療的ケアの必要な児童・生徒の個別指導に使用したりと、生徒の実態に合わせて両方を使用することが効果的です。

〈マルチメディアDAISY図書の効果〉

- 文字の読み書き
- 語彙の獲得
- 読み聞かせの楽しさを感じる
- 図鑑で調べ学習
- LLブックで模擬外出体験

使い方は自由に授業に展開できる

今後のマルチメディアDAISY図書の効果的な活用を考えていくうえで、紙媒体と連携させた意識的な取り組みが重要です。マルチメディアDAISY図書を見せるだけでなく、日々の読書指導の中で、集団での視聴を体験することで、友達を意識する、指さしで友達へ読み聞かせるなどの人へのかかわりを意識させながら活用し、表現する力（伝える力）、想像する力、興味・関心を広げる力、楽しさを深める力などを獲得することが有効だと考えています。

さらに、家庭への啓発も必要となっていくのではと考えています。これに

については次年度以降検証していくこと
とします。

おわりに

障害などで紙媒体や普通の大きさの
本では読書することが困難な子どもた
ちにとって、自分で読む、聞くことを
体験できる電子図書は、本にかかわる
ことができる、きわめて有効な機会だ

と考えます。

最近では通常の小学校に在籍してい
る発達障害の児童・生徒が増えており、
同様の児童・生徒が本校にも在籍して
います。充実した学習につながること
から、これからも子どもたちの読書へ
の興味・関心を高める有効な手段とし
て、マルチメディアDAISY図書がより
充実していくことを期待しています。

